

都猫
心連
囊公
共

記念誌
廿三回
同

芦丈翁三十三回忌 記念誌

目次

現代連句の父	東明雅	2
芦丈先生の状差し	土屋実郎	3
芦丈先生「十六行」のこと	村野夏生	4
百擲み	根津美紗	5
百韻	担当 倉本路子 橘文子	6
図版		10
芦丈翁年譜		20
式次第		24

現代連句の父

猫蓑庵 東 明雅

芦丈先生は加賀の北枝から始まって希因・闌更・蒼虬・芹舎・凌冬と流れて来た伊勢流俳諧の第八代宗匠であった。しかし、先生の代表的作品『山一重』（昭和六年刊）などを見ると、「その句朗々、その韻洋々、元禄の英を含み、天明の華を唱ひ、之を行るに、昭和の文物を以てす」と贅川他石により評せられている通り、田舎蕉門と言われる伊勢流とは、似ても似つかぬ高踏・脱俗の目ざましい俳風であった。

先生が「七部集」の中でも、ことに「冬の日」を愛しておられた事は、拙著「芦丈翁俳諧聞書」（六十九頁）に、先生自身語っておられる通りであるが、「冬の日」以外の七部集、また蕪村の「一夜四唸」・「ももすもも」などの名作を味読し、また去来の「去来抄」・土芳の「三冊子」・許六の「俳諧問答」・几輩の「附合てびき蔓」など一流の俳論書を読みこなして、初めて到達された俳境で、昭和十二年には先生畢世の傑作とされる「下蔭三吟」が完成・出版され、先生の名声も定まったのであるが、これは先生が男盛りの五十歳の時であった。

先生を現代連句の父と呼ぶのは、先生がその後四十五年も生きられ、しかも弟子を直接教える外「山襖」という連句雑誌を作って後輩を導かれた為であると思っっている人が大部分であるが、現代連句の大道を示したという意味で、五十歳の時から現代連句の父だったのである。

芦丈先生の状差し

抱虚庵 土屋 実郎

誠に残念なことに、私は芦丈先生の警咳に接したことがない。ただ瓢左師が芦丈先生を「吾師さん」と呼び、敬愛の情をこめて居られたことから、その風貌を想像するのみであった。今般、明雅先生から三十三回忌の記念事業につきお話があり、私共都心・湘南でその作品集刊行を分担することとなった。世に、芦丈先生の連句作品は三千巻と称されている。今、その作品はどうなっているのか。「ともかく根津家を訪ねよう」ということで、静司さんと伊那にむかったのは去年の六月であった。作品はご子息、故忠二さんにより完璧に整理されて居り、孫の美紗さんによって立派に保管されていることが判った。展示のための遺墨や作品の一部の借書も快諾され、昼食のご馳走をいただきながら、長押の方に目をやると、一間ほどもあるうかという長い木造の状差しが掛かっている。墨書で南信・北信・奥羽・関東・北陸・東山・東海・近畿・山陰・山陽・四国・九州と区分けがしてある。聞けば先生の手作りで、ここが先生の居間であったという。一瞬、私は電撃のようなものを感じ、これが日本中の連衆との風交三千巻の発信地であり、原点であったのかと感慨一入であった。そしてまた、抱虚庵の末席に列なる者として、身の引き締る思いであった。

芦丈先生「十六行」のこと

爛柯主宰 村野 夏生

○新宿の三階小屋裏で根津芦丈先生の「十六行」を紹介する文章に出会った。

○鷗沢四丁アテ。連句鼓吹の爲十二行考案試作を示したのに対する返事。「連句は歌仙に上越すものは無之候へども、小生ハ寧ろ、十六句。

(一) 表四句裏四句以上二折。二折も回数。

(二) 月・花。

(三) 春秋二句より三句迄。

(四) 夏冬、句より二句迄。

(五) 総て三句去り

(六) 表に神、釈其他、嫌ハぬハ、外の短いものと同一。

(七) 起句、春の場合は脇か第三に花をする事。もし出来ぬ時は二折七句めに別の季の花をする事(冬季に正花あり)

(八) 月は、五句めを定坐として、起句に秋以外の月の出た場合は素秋差支なしとして出来るだけ四季を欠かぬ事。

こんな事にすれハ雑句も相応にあるから、あまり究屈でもなからんかと存候。」(根津芦丈書簡より見た現代連句形式の一試考)「懇道」昭和五十二年十一月第四号所収(三浦隆より)

○歌仙の簡素化、実にここに極まれり、だ。

○新人がまさに悩むところ、表六句のタブーをズバリ切り捨ててこそ小気味いい。

○総て三句去り、と明快。四季にも雑句にも相応の気配りあって自由だ。

○そして次の一行がいい。

「川連句の不合理や非科学的の処は芭蕉翁の心法にてどんどん改めて行けば差支なしと存候。小生なども諸制約や氣に入らぬものはちつとも守り不申云々」……以下略・全書

○書簡日付は、昭和十年三月。十二年の一月には三吟歌仙集「下蔭三吟」を刊行している。

百擱み

芋庵 根津 芙紗

「なんだ、われは糞擱みかアハハ」。祖父は「俺の手をみる百擱みだぞ」といつて自分の手を見せた。大きな手だった。三十三回忌に当りあの百擱みというのはこの世からあの世へも続いているのだらうか。年忌の度に人々の手を煩して追悼してただけるなんて本当にありがたいことだ。死んだあとの幸福もあるのだとつくづく思う。掌にある横一文字の筋この手相のものは米銭に恵まれるという。金銭花取る風の手や百握り“蛙井集。それじゃ糞握りもあるのかと調べたら掌の太い線が横に通らず斜めに切れているもので貧乏な手相、とある。やれく。百擱みは百握りのことなのだ。方言専門の方に尋ねた。「何をさがしても出ていないが、諏訪地方の方言“にありました」との返事、諏訪から伊那辺の方言なのである。私がおんな所に居たつてことは百握りの隅に擱ってしまったらしい。

いま健康のあれこれが盛んだが、年よりも良質な蛋白質が必要だとか骨が弱くなるからカルシウムが大切だ、海藻もいい、酢の物は血流をきれいにするとか、腹八分目がいいとか、常に聞かされていた、言ったり書いたりした言葉の一つ一つがいまも生きていることは、何よりもうれしいことだ。

東先生はじめ多くの方々にご苦勞おかけし誠に申し訳なく、心より御礼申し上げます。

